

〔共同研究：天変地異の社会学Ⅲ〕

ジャワにおける天変地異と王の神格化

深 見 純 生

目 次

はじめに

- 1 2006年の地震と噴火——スルタンの出番か
- 2 スルタンの名前
- 3 世界の中心としての王——中心と四囲
- 4 王の神格化
- 5 ラブハン——精霊の支配者と交信する王
- 6 マリジャン翁——ムラピ山の番人
- 7 知事世襲制

おわりに

はじめに

東南アジア島嶼部は20世紀まで大半が人間の居住に適さない熱帯雨林におおわれていた。その中でジャワ（ジャワ島の中部と東部）はほとんど唯一例外的に、水稻耕作による豊穡が約束された瑞穂の国である。気候は乾季でも雨が降る熱帯雨林気候と違って、乾季にほとんど降雨を見ない熱帯モンスーン気候であり、かつその乾季の乾燥はヌサトゥンガラ（小スンダ列島）東部ほど厳しくないので人間の居住に適している。森林も人間の力ではほとんど太刀打ちできない圧倒的な熱帯雨林と異なり、共生可能な季節林であり、多くの恵みをもたらす。この穏やかな気候と植生に恵まれたジャワにおいて、最も神意を感じさせる天変地異は疫病を別にすれば、気象よりも地理つまり山と海に由来するといってよい。すなわち火山の噴火と地震（および津波）である。他方でジャワの自然の豊かさとそれゆえの水稻耕作に基づく居住適性の高さは火山のたまものでもある。とりわけ火山に由来する肥沃な土壌と豊富な湧水が稔り豊かで安定的な水稻耕作を可能にしている。ところがジャワ島はヒマラヤ造山帯の一部をなすため、この火山帯に平行してインド洋側にスンダ海溝が沈み込んでいて、ここは地震の巣であり、地震は時として大きな津波を引き起こす。かくしてジャワの居住適性の高さと同変地異はメダルの両面のようなものである。

このようにジャワの社会と文化において火山の噴火と地震（および津波）という天変地異

は宿命なのである。したがって、ジャワの王権が正統性を主張する時に、この宿命を意識したさまざまな工夫を試みることになる。本稿ではジャワにおける王権論の中に天変地異とそれへの対処を位置づける研究の入り口として、ジャワにおける王の神格化についていくつかの側面から検討する。具体的にはとくに、16世紀後半中部ジャワ南部に成立したマタラム Mataram 王国が1755年に分裂した際に生まれた、ジョクジャカルタ Yogyakarta 王国のスルタンを中心に取り上げる。

王都ジョクジャカルタは、北のムラピ Merapi 山頂までと南の海岸までともに約30キロメートルの位置にあり、これは周知のとおり北山・南海を強く意識した都市計画によるものである〔鳴海1993参照〕。ここにすでに世界の中心としての王都という王権のありようとその神格化を読み取ることができるのだが、それを論じる前に近年の天変地異に際して、スルタンとその王宮に災厄除去が求められたことを取り上げたい。ついで、王が世界の中心と位置づけられるとともに神々の子孫とされること、そして、王が精霊世界と交信するラブハン labuhan 儀礼を取り上げ、最後に近年の状況に戻ることにしたい。

1 2006年の地震と噴火——スルトンの出番か

近年の事例では2006年にジョクジャカルタ地方は、南岸を震源とする直下型地震に襲われた。犠牲者は北東隣のクラテン Klaten 県を含めて6000人近くに上った。地震の規模の割に被害が大きかった背景について、筆者はすでにこの共同研究プロジェクトで報告している〔深見2008〕。この時津波はなかったが、同じ時期にムラピ山が噴火を繰り返していて、強制避難を迫られた人は1万人以上にのぼった〔『アジア動向年報』2007：396〕。ジョクジャカルタの守護精霊の住み処とされる南海と北山がともに激しい動きを示したのであり、2006年はジャワの災害史において特筆されることになるだろう¹⁾。

この天変地異とくに地震の際に多くの人がパニックに陥った。そしてイスラムの教えにいう終末の到来を感じた住民も少なくなかったといわれる。同時にスルタンとその王宮に除災のための秘儀を期待する声が聞かれたのは、インドネシア共和国という現代の国民国家の中であって、スルタンを世襲の州知事とするジョクジャカルタ特別州らしいことであった。すなわち、打ち続く災害に対してスルタンと王宮に、トゥングル・ウルン Tunggal Wulung という名の神旗の巡回を求める声が上がった。この神旗は災厄を払う家宝（プサカ pusaka）

1) 『アジア動向年報』2007年版は、2006年のインドネシアについて、大規模な自然災害にとくに言及している（396-397頁）。本稿の地震と噴火以外に、7月17日中部ジャワのチラチャップ（ジョクジャカルタの西150キロ）の南240キロの海底で地震が発生し、660人が津波に巻き込まれた。この年鳥インフルエンザが流行してインドネシアの死者数が世界最多になった。その他、5月29日には東部ジャワのシダルジョで天然ガス開発のボーリングにより大量の熱泥が噴出し、数カ村が泥没するなど広域にわたる大きな被害を出した。熱泥の噴出は本稿執筆の2014年3月現在まだ止まっていない。

ジョクジャカルタ空港では翌2007年3月7日、ガルーダ航空機が着陸に失敗して炎上し多数の死傷者がでた。この時たまたまジョクジャカルタ滞在中の筆者は快晴無風の中での事故に首をひねったが、後になって、その時予期せぬ突風が吹いたらしいという噂を聞いた。

として王家に伝わるものである。具体的には旗カンジェン・キアイ・ドゥダ Kanjeng Kiai Dudha が槍カンジェン・キアイ・スラメット Kanjeng Kiai Slamet に結ばれると神旗カンジェン・キアイ・トゥングル・ウルンとなる。旗はカアバ神殿の掛け布を切り取ったもので、その中央に信仰告白などが金色で書いてある [Danumurti 2007]。

神旗の名前トゥングル・ウルンは、マジヤパヒト Majapahit 王国最後の王とされるブラウィジャヤ Brawijaya 王の時代のマジヤパヒトの武将に由来する。彼は王国の衰退が著しくなると、ひそかに都から逃亡して西に向かった。ベジ Beji 村に至って庵を結んで修行に励んだが、ある時プロゴ Progo 川のほとりの樹下で瞑想中にモクサ (moksa 消滅。語源はサンスクリット語 moksa=解脱) したと伝えられる。ベジ村はジョクジャカルタ特別州スレマン Sleman 県に実在し、彼のモクサの場所では今日も人々が様々な儀礼をおこなう [Danumurti 2007]。ここでは神旗の名前の由来が説明されるだけで、この人物と神旗の関係は不明である。マジヤパヒトは13世紀末に建国され15世紀末まで東部ジャワを中心に栄えた王国であり、彼が歴史的事実とすれば15世紀末か16世紀初め頃の人物であろうが、当然イスラム化以前であり、旗にイスラムの信仰告白が記されていることとの関係は不明である。

神旗とその名前の由来が何であるにせよ、天変地異に際して少なくとも5回、災厄を除くためにこの旗の市内巡回が行われたという。最初は1891年コレラが大流行した時であった。2回目は1918年12月のインフルエンザ (いわゆるスペイン風邪) の流行に際してスルタン・ハムンクブウォノ Hamengkubuwono 7世のもとで行われた。ついで1932年1月22日疫病 (コレラか) の流行に対して、ハムンクブウォノ 8世の命令で行われた。1946年 (1947年?) 初め、ペスト対策として日没後にこの神旗が市内を巡回すると、翌日からペストが消え始めた。最後 (5回目) は1998年5月19日の夜秘かに車で市内を巡回し、広く市民に知られることはなかったという²⁾。この時は30年以上に及ぶスハルト開発独裁体制の崩壊前夜であり、前年から全国で起こっていた抗議行動と暴動や騒乱が翌20日にかけて首都ジャカルタはじめ各地で最高潮に達した時である。中部ジャワではとりわけスラカルタ Surakarta が激しい騒乱と放火略奪に見舞われたが、これと対照的にジョクジャカルタでは、スルタンが抗議デモの先頭に立ち、秩序ある行動を訴えたこともあって、おおむね平穏であった。

1946年の事例では、スルタン・ハムンクブウォノ 9世は神旗巡回を許可しただけでなく、一晚中瞑想を続けた。王宮内では7日7晩にわたって様々な儀礼が行われ、供物が捧げられた。ペストは南海の女王ニヤイ・ロロ・キドゥル Nyai Loro Kidul (またはカンジェン・ラトゥ・キドゥル Kanjeng Ratu Kidul, 後述) の怒りにより発生したと噂され、さらに、神旗巡回を非科学的と笑った対策本部長の医師が40日後 (つまりペスト終息後) に死亡したのはニヤイ・ロロ・キドゥルの逆鱗に触れたためと噂されたという。

2) 神旗巡回に関してはいちいち典拠を示さないが、中島 [1933: 35-37] および Danumurti [2007: 12-13] による。1回目については中島のみ記し、4回目は中島によれば1947年である。1932年については Soedjana [2003] が写真つきで紹介している。

2006年にも神旗巡回を求める声が上がった。1998年の神旗巡回を知る人はほとんどいないようだが、1946年の事例を覚えている人と、その語りを聞いた人は多かったのである。しかし、この時王宮は動かなかった。王宮の責任者（スルタンの弟）はジレンマにあることを認めつつ、次のような理由を述べている〔*Keris* 2007-2: 18-19³⁾〕。

人々はすでに近代的になり、教育があり、プラグマティックであるので、人々も伝統とは異なる意見を持っている。

災厄が去ったとしても、それは神旗トゥングル・ウルののおかげか、それともスルタンの祈りが聞き届けられたからなのか。

神旗は本当にどうしようもなくなった（朝病夕死・夕病朝死で手の施しようがない）時に外に出すものである。今はまだ合理的に対処できるから必要ない。さらに、旗の巡回に携わった者は間もなく死ぬ。

もはや神旗に頼る時代ではなく、もはやスルタンと王宮の儀礼に頼る時代ではないという。その一方で最後に頼れるのは神旗かもしれないという思いを禁じえないでいる。社会の近代化、とくに教育の普及、合理的思考の広まりのなかで伝統的価値観が揺れ動いていることがよくわかる。

打ち続く災害を前に、このようにスルタンと王宮に除災のための儀礼を求める声が上がったのはけっして偶然ではなく、その背後にはジャワにおいて古代以来王を神格化するための様々な工夫が行われてきた歴史がある。次にその歴史的背景をいくつかの側面から取り上げる。

2 スルタンの名前

現在のジョクジャカルタのスルタンはふつうスリ・スルタン・ハムンクブウォノ10世 Sri Sultan Hamangkubuwono X と呼ばれる。スリはサンスクリット語シュリー Śrī（吉祥な）が語源であり、ジャワやバリでは稲の女神の名前でもあるが、ここでは貴人の称号として用いられている。スルタンはもちろんイスラム世界の世俗君主の称号である。ハムンクはジャワ語で膝に抱く、ブウォノはサンスクリット語ブアナ buana からの借用語で世界、宇宙を意味するので、ハムンクブウォノは全世界を抱く者あるいは全世界の保護者というほどの意味になる。マタラム王国は1578年に細々と成立し〔深見2011〕、17世紀にはジャワのほぼ全土を支配した。18世紀になると打ち続く内乱の果てに1755年に二分されてジョクジャカルタ王国が誕生した。以来その王は代々スルタン・ハムンクブウォノと称し、現在は10世であり、スルタン10世ともハムンクブウォノ10世とも呼ばれる。なお、ジョクジャカルタの語源はインドの叙事詩『ラーマーヤナ』の王都アヨードヤ Ayodhya といわれている。またジョクジャ

3) これらの意見を紹介している『クリス *Keris*』はカラー写真をふんだんに使ったインドネシアの文化遺産に関する季刊誌である（A4 サイズ）。その2007年第2号（2007年4月）は表紙に正装したハムンクブウォノ10世を大きく載せ、ジョクジャカルタの天変地異とその対処について15頁にわたって特集している。その中でとくに神旗トゥングル・ウルンを大きく取り上げている。

カルタの王国と王都の正式名称は、下記の王名の最後にあるジョクジャカルタ・ハディニンググラットである。

ハムンクブウォノ10世の正式名称は次のとおりたいへん長い。

Sampeyan Dalem (内裏様) Ingkang Sinuhun (誰もが跪かれる方) Kangjeng Sultan (スルタン陛下) Hamengku Buwana (世界を膝に抱く) Senapati ing Ngalaga (元帥) Ngabdurrakhman Sayidin Panata Gama (イスラムの寛大な庇護者) Kalifatullah (預言者ムハマドの後継者) ingkang Kaping Sadasa (10世) ing Nagari Ngayogyakarta Hadiningrat (ジョクジャカルタ・ハディニンググラット国の)

この20ほどの単語の語源はジャワ語、サンスクリット語、アラビア語の3つである。これはジャワの基層文化の上にインド文化の影響が重なり、その上にさらにイスラム文化が重なったジャワの文化史を反映している。

1755年の分裂によって生じたもう一つのスラカルタ王家の王は、当時のパクブウォノ Pakubuwono 3 世以来代々この名前を継承し現在は13世である。パクはジャワ語で軸、ブウォノは既述のようにサンスクリット語源で世界、宇宙なので、全世界の中心軸という意味である。この王国および王都の正式名称はスラカルタ・ハディニンググラットであり、王はスルタンではなくススフナン Susuhunan というジャワ語の称号をつけて呼ばれる。

スラカルタの王家から1757年にマンクヌゴロ Mangkunegoro 家という分家が生まれた。当主は代々マンクヌゴロ〇世と呼ばれ、現在は10世である。マンクはハムンクと同じ語で膝に抱く、ヌゴロはサンスクリット語ナガラ nagara が語源で国、都を意味するので、マンクヌゴロは国を膝に抱く者というほどの意味である。ジョクジャカルタの王家からも1813年パクアラム Pakualam 家という分が生じ、現在はパクアラム 9 世である。パクは上記のようにジャワ語で軸、アラムはアラビア語からの借用語で世界、宇宙の意味なので、スラカルタ王家と同様に全世界の中心軸というほどの意味である。

このようにマタラム王家の諸王は宇宙(ないし世界、国家)の中心あるいは保護者を意味する名称を帯びていたし、その末裔たちは現在も帯びている。こうした諸王の名前の背後にはイスラム化以前からの長い文化史が控えている。次に王の神格化という観点からその一端を繙いてみる。

3 世界の中心としての王——中心と四囲

① 訶陵——世界の中心にして神々の住み処

王または王宮を世界の中心とみなす王権論は、古くは7～9世紀の中部ジャワに栄えた訶陵国についての漢籍史料に現れている。訶陵は現地の刻文史料のシャイレンドラ Śailendra に同定する見解が有力であり、このシャイレンドラが大乗仏教寺院ボロブドゥル Borobudur の建立者と考えられている。この壮麗な寺院は鎮護国家の護国寺として王権の正統性に関わるものであったかもしれない。

『新唐書』巻222下の訶陵伝に「旁小国二十八莫不臣服。其官有三十二大夫」という一節がある。「まわりの小国28はすべて服従している。その官（宮廷）には32人の高官がいる」というのである。この28と32という数字の背後にインドから借りた宇宙観があることは研究史の早い段階から指摘されている〔Rouffaer 1918: 149-; Krom 1931: 167〕。28は東西南北の基本方位の4とインド（ジャンブドヴィーパ Jambudvīpa）を取り巻く7つの大陸のすべて、つまり全宇宙を意味している。またインドの天文学における「二十八宿」は4方位に7つずつ配した星座のことであり、天文と星占いの基礎をなすものである〔岩本1988: 550〕。いずれにせよ28は全世界を象徴する数字であり、訶陵は自らを全世界の中心に位置づけていることになる。

「其官有三十二大夫」は全世界の中心である訶陵の宮廷のことである。この32を4+28に分解して理解する説もあるが〔Krom 1931: 167〕、三十三天（忉利天）という神々の住み処を意味するものとして理解しておきたい。宇宙の中心たる須弥山上にあって、帝釈天（インドラ Indra 神）の率いるところであり、四方に各々八天が配され、その中央に帝釈天が居住する〔岩本1988: 329〕。すなわち、訶陵の王宮を神々の住み処になぞらえ、その中心（=王）をインドラ神になぞらえていることになる。この解釈が許されるとすれば、訶陵の王は神々の王（デーヴァラージャ Devarāja）たるインドラ神とみなされているのである。地方支配者を宮廷に取り込み、それらを神として扱うとともに、自身を神々の主宰者たるインドラ神になぞらえていると解釈できる。

古代ジャワにおいて在位中の王を神の化身あるいは神そのものとみなす観念が存在したかどうかは慎重な検討を要するであろう。しかし少なくとも、28や32という数字のシンボリズムに、自らを世界の中心に位置づけるだけでなく、王を神に、王宮を神々の住み処になぞらえようとする意図を読み取ることも可能であろう。

② マジャパヒトの属国——4方面に区分

13世紀末から15世紀末まで東部ジャワを中心に栄え、他の島々にも影響力を有したマジャパヒト王国の宮廷頌詩『デーシャワルナナ Deśawarṇana』（1365年）が第13詩章と第14詩章において属国を示している〔Robson 1995: 33-34〕。それらはマラユ Malayu 地域、タンジュンナガラ Tanjungnagara の島、パハン Pahan 地域、そしてジャワ島の東の4方面に分けて示され、それぞれ24, 24, 27, 36の属国が列挙される。そのほとんどが現在の地名と同定可能であり、4方面がそれぞれ現在のスマトラ島、ボルネオ島、マレー半島、そしてバリ島から東の島々（スラウェシを含む）にあたることは明らかである。

ジャワ島からみた島々の地名を挙げるので、当然ながら東西南北の4方位には合致しない。しかし、3や5など4以外に分けるのも可能であるのに、4方面に区分されている。韻律の都合やその他何らかの事情があるのかもしれないが、四圍の観念が反映している可能性がある。

③ マタラム王国と四囲の観念

1578年に成立したマタラム王国の王宮は最初の100年間にコタグデ Kotagede からクルト Kerto, プレレッド Plered と移動したが、いずれも現在のジョクジャカルタ市の南東または南数キロに位置する。ついで内乱のため1680年カルタスラ Kartasura に遷都し、さらに1745年その10キロあまり東方のスラカルタに遷都した。1755年王国は二分され、スラカルタを王都とするスラカルタ王国の他にジョクジャカルタを王都とするジョクジャカルタ王国が成立した。王家と王宮は1945年インドネシア共和国が成立した後も現在まで存続している。

スラカルタ宮廷舞踊に通暁する富岡三智によれば〔2010年6月7日私信〕、スラカルタ宮廷には4方位 kibrat papat の観念がある。すなわち北はクレンドワホノ Krendowahono の森、南はパラントリティス Parangtritis [海岸]、東はラウ Lawu 山、西はムラピ山であり、それぞれ王宮を護る神がいる。瞑想を始める前や舞踊ブドヨ・クタワン Bedhoyo Ketawang (第5節参照)を上演する前などには、お香を焚いてこれら4方位に位置する神に祈るという。クレンドワホノの森では現在も水牛供犠の王宮儀礼が行われ、これはシヴァ Śiva 神の妃ドゥルガー Durgā 女神に捧げられるものである〔Headley 2004: 282-329; Lucas 2010: 118〕。このことは4方位の観念の背後に先イスラム時代の文化伝統が存在することを示している。

スラカルタの場合は東にラウ山、西にムラピ山という3000m前後の聖山が存在するので、東西軸は地理的・視覚的に明瞭であり、南北軸もまたわかりやすい。これに対してジョクジャカルタの場合は、南北軸は視覚的に顕著だが東西軸は不明瞭である。とりわけ西は地理的に認識困難である。後述のラブハン labuhan 儀礼が行われる聖地は南(パラントリティスそばのパランクスモ Parangkusumo)と北(ムラピ山)そして東(ラウ山およびドレピ Dlephi)に位置する。

しかしながら、ジョクジャカルタにはパトック・ヌガラ pathok negara という東西南北の四囲がある。パトックは標柱、ヌガラは国の意味なので、直訳すれば国家標柱である。ジョクジャカルタの王宮前広場に面するソノブドヨ Sonobudoyo 博物館の展示パネルによれば〔2010年8月29日確認〕、ジョクジャカルタ王宮が所有する4つのマスジッド masjid (モスク)のことであるが、もともとは4人のイスラム法官のことであった。彼らは各々免税村落(プルディカン・デサ perdikan desa)内に住み、マスジッドを建立することが認められた。そのマスジッドはあらゆる宗教活動、社会活動の拠点となった。これらのマスジッドはジョクジャカルタ王国の初代スルタン、ハムンクブウォノ1世によって建立されたといわれて、ジョクジャカルタの都市計画に当初から含まれていたと想像される。ただし王都ではなく、その外数キロに位置する。その一つは17世紀のクルトの王宮からほど近いウォノクロモ Wonokromo にあり、その当時の建立との言い伝えもある〔Abdul 1999: 195-197〕。筆者は2011年3月にその4か所を訪れたが、現在の建物はいずれも当初のものではなく建て替えられたものである。すべて小河川を背後にもつ立地なので防衛上の意図があったのかもしれない

いが、詳細は不明である⁴⁾。

古代におけるインド文化の影響から検討を始めたが、四囲の観念あるいは中心と四囲で1単位（一つの全体）とする世界観はジャワばかりでなくインドネシア地域に広範にみられるものであって、インドの一方的な影響というわけではなく、土着の観念とインド文化が摺合したものであろう〔オッセンプリュッヘン1987；ピジョー1987参照〕。

とくにジャワでは中央に4方向を加えた5が一つの小宇宙を形成するという観念があった。村落レベルにおいても、母村と四囲の4つの子村がひとまとまりをなすと考えられた。この観念はジャワ暦の5曜日にも関係していて、クリウォン Kliwon, ルギ Legi, パヒン Pahin, ポン Pon, ワゲ Wage の5曜日はおおの中心と東西南北にあたり、5曜週が市場週とも呼ばれるのは、その曜日に各々の村に市が立つからである〔Rouffaer 1927: 405。オッセンプリュッヘン1987；ピジョー1987参照〕。

④ 8方位

1755年の分割前の王都には内宰相 patih jero と外宰相 patih jaba の下に4人の内大臣 nayaka jero と8人の外大臣 nayaka jaba という高官がいた。外大臣ももとは4人だったが17世紀後半に8人になった。内は王宮と王都の諸事を担当し、外は王族や官吏の采邑が存在する内域 nagaragung の統治を担当する。王国分割後は両王国とも宰相1人、内大臣2人、外大臣4人になった。しかし、まもなく内大臣は4人に増員され、宰相1人と大臣8人になった〔Rouffaer 1931: 285-288〕。ルウファールはここを出発点にして、ジャワでは4方位を基礎にしつつ、8方位で全体を表現することも多く、中心を加えた9つで小宇宙が形成されると定式化する。この場合、中心と四囲（東・西・南・北）の5つを中心とみなし、そのまわりに四囲（東北・東南・西南・西北）があるので、中心と四囲の考え方が繰り返されていることになる。5とともに9も聖なる数字なのである〔Rouffaer 1931: 288-289〕。

訶陵とともに6～7世紀のジャワに存在したと考えられる丹丹国における八座がこれに関係するかもしれない。すなわち『通典』巻188の丹丹伝に「其大臣八人、号曰八座、並以婆羅門為之」と記される。この国の大臣は8人いて八座と呼んでおり、みなバラモン（サンスクリット語ブラーフマナ brāhmaṇa）がその地位にあるという。中心（王）のまわりをすべてインドの高文化の担い手であるバラモンで固めていることになるが、8方位で全体を表現する土着の観念がインド的な表現をもったと考えることができよう。

マタラム王国の史書『ババッド・タナ・ジャウイ Babad Tanah Jawi』の神話伝説的な部分においても、世界観に関わる重要な箇所では8が現れる。始祖アダム Adam に始まる系譜が語られ、系譜はいまだ神々の世界だが舞台がいよいよ天上界から地上界すなわちジャワに移ろうとする場面である（第3章）〔深見訳 2012a: 157 参照〕。すなわち、バタラ・グル

4) pathok negara でインターネット検索すれば、多数のインドネシア語のサイトが現れるが、情報は錯綜している部分が多い。なお後述のマタラム王国の史書『ババッド・タナ・ジャウイ』にはこの語は見られない。

Bathara Guru（シヴァ神の別名または化身）の5人の子のうちバタラ・ウイスヌ Bathara Wisnu（ヴィシュヌ Viṣṇu 神）が地上界に降ろされ、精霊の王となって8か所を支配した。他の子バタラ・ブラマ Bathara Brama（ブラフマー Brahṁā 神）も地上界に降ろされ、ジャワ島を服従させたという。

⑤ 可視界と不可視界

シヴァ神の子のブラフマー神がジャワにおいて人間世界の王となり、その子孫が数十代をへてマタラム王家に連なることになる。マタラム王家の祖先はブラフマー神であり、シヴァ神であり、また人類の始祖アダムの末裔たるその他様々な神々であったことになる。ブラフマー神の兄弟たるヴィシュヌ神がジャワの精霊の世界を支配する王となったことは、マタラムの王はジャワの精霊の王と同族であるという位置づけがなされていることになる。そして、バタラ・ウイスヌが精霊の王となって8つの場所を支配したとされる。これはジャワのすべての精霊を支配したことを含意している。

そこに列挙される8か所は、冒頭のムラピ山を除いて実在の場所ではないこと、つまり不可視であることは重要である。すなわちムラピ山は人間世界に属するとともに精霊世界にも属するのであり、可視界と不可視界の2つの世界をつなぐ位置づけが与えられているのである。このことは第5節で取り上げるラブハン儀礼にも関連がある。

4 王の神格化

『ババッド・タナ・ジャウイ』はイスラム化したマタラム王家の諸王の系譜と事跡を語るものであるが、同時に前記のようにマタラムの諸王に様々な神々の子孫という位置づけが与えられている。王を神格化するための工夫の一つと考えられる。イスラム化以前のジャワの文献で歴史を語るものは少なく、わずかに『デーシャワルナナ』と『パララトン Pararaton』が知られるだけである。ここで両作品における王家の始祖の神格化を確認しておきたい。

『パララトン』はシンガサリ（1222～1292）およびマジャパヒト（1293～16世紀初め）両王国の諸王の系譜と事跡を語るものであり、16世紀初め頃に成立したと考えられる。両王国は別の名前と呼ばれるけれども系譜的には連続している。したがって、始祖はシンガサリの初代ラージャサ Rājasa（別名ケン・アンロック Ken Angrok）である。『パララトン』においてはブラフマー神が人間の女性と交わってもうけた子であり、ジャワの土地を支配するという予言がブラフマー神から与えられている〔深見訳2003：86-87参照〕⁵⁾。

1365年マジャパヒトの宮廷詩人が時の王のために謳った宮廷頌詩『デーシャワルナナ』では、ケン・アンロックは何度かギリナータプトラ Girināthaputra つまり山の王の息子とされる。ギリナータは明らかにシヴァ神のことである〔Robson 1995: 50〕。『パララトン』でブラフマー神の子とされたケン・アンロックはここではシヴァ神の息子とされている。のみな

5) ケン・アンロックが歴史的事実とすれば、じつはシンガサリ太守の私生児であったとする説がある〔Boechari 2012: 249-272〕。

らず『デーシャワルナナ』によれば、彼は死後には二重の寺院にシヴァとしてまたブッダ Buddha として葬られたという [Robson 1995: 53]。つまり死後はシヴァでありブッダであるとの位置づけが与えられている。これはシヴァとブッダの両方になったというより、シヴァ教と仏教という2大宗派の違いを超えた至高の原理になったという解釈が成り立つ [石井 1994]。

このように、ジャワの王は世界の中心にあって神々の子孫として君臨するとされる。シンガサリ・マジャパヒト時代の諸王が死後に神として祀られたことは、本稿ではとくには取り上げないが、始祖ラージャサのみならず、多くの場合にうかがうことができる。すなわち寺院は墓廟であり、寺院に本尊として祀られる尊像は王や王妃など故人の肖像である。とすれば、故人を神格化して祀っているのである [千原1975; Kinney 2003]。

最初期のマタラム諸王の墓所はコタグデに、スルタン・アグン Sultan Agung (位1613~1646) からはジョクジャカルタの南20キロほどのイモギリ Imogiri に設けられている。そこは、ワリ Wali と呼ばれる初期イスラム聖人などの墓所と同様に、聖なる場所あるいは霊力ある場所 (ジャワ語でクラマツト keramat) とみなされ、聖墓巡礼の対象になっている。死後に神格化されているといえよう。

このようにジャワの王は神の子孫とされ、死後は神として祀られていると考えることができる。しかし、これだけでは現身の王が神として統治すること、人々から神とみなされることにはならないであろう。現身の王が神として人々に向きあい、人々もまた現人神として王に接するのかどうかはなお検討を要する問題であり、ここでは立ち入らないことにする。しかしながら、ジャワの王は神そのものではないとしても、神に近づくことが求められてきたのであり、そのことによって秩序と安寧を維持することが期待されてきたとはいえそうである。つぎに、マタラムの諸王とくにジョクジャカルタのスルタンがジャワの精霊の支配者たちと感応しあうことを取り上げたい。

5 ラブハン——精霊の支配者と交信する王

毎年行われるジョクジャカルタ王宮の重要な儀礼にラブハンがある。スルタンが精霊の主と交感する機会であり、王と王国とその民の平安を維持するために欠かせないとされる。ラブハンの語義は水中 (海や川) に何かを投じることであり、ここではその場所を支配する精霊に供物を捧げることを意味し、王宮儀礼としてのラブハンにはラブハン・ダルム labuhan dalem と呼ばれる。以下はラブハン・ダルムのことである。なお、ラブハンにはスラカルタ王国でも行われたし現在もその王家によって行われるが、筆者に比較的多く情報が得られたのはジョクジャカルタの場合であり、また南海北山の天変地異という本研究の枠組みからはジョクジャカルタがふさわしい。

ラブハンは下記のような由来に基づくとすれば、マタラム王国の初期、遅くとも17世紀から行われていたはずだが、筆者にはその詳細は明らかでない。現在ジョクジャカルタではス

ルトンの誕生日の翌日に行われる。もともと即位日の翌日だったが、オランダ支配下の1939年に即位したハムンクブウォノ9世が、インドネシア独立宣言（1945年）に続く独立戦争期の混乱が終わって1950年にラブハンを再開した時、オランダの関与を忌避する意図から誕生日の翌日に変更したのであった〔Purwadi 2007: 267-268〕。なお日取りは西暦ではなくジャワ暦⁶が用いられる。

通常は南の海岸（パランクスモ）、ムラピ山、ラウ山の3か所で各々の精霊の支配者に供物を捧げる。ジャワ暦のウィンドウ windu（8年周期）に従って8年に1度、ドレピ（またはドレピ・カヒヤンガン Dlephi Kahyangan）でも同じように供物を捧げる。この4か所を東西南北の四囲に見立てる言説もあるが〔Argo 2006: 129-135; Lucas 2010: 119〕、ラウ山とドレピは実際にはジョクジャカルタの北東に位置する。通常のラブハンを小ラブハン labuhan alit といい、8年に1度4か所で行うのを大ラブハン labuhan ageng という。この「大」に本来あるべきという意味が込められているなら、上に述べたような中心とまわりの4の5で一つの全体をなすという観念と関わりがあることになる。

ラウ山に祀られる精霊の支配者は、マジヤパヒト王国の最後の王ブラウイジャヤ5世とその王子の2人の霊であり、スナン・ラウ Sunan Lawu 1世、2世と呼ばれる。ここにはマタラム王家がマジヤパヒト王家の子孫であるとの主張、つまりマタラム王国はマジヤパヒト王国を継承するジャワの正統な王権であるとの主張が込められている〔Purwadi 2007: 268〕⁷。

他の3か所はいずれも南海の女王カンジェン・ラトゥ・キドゥル Kanjeng Ratu Kidul に関わりがある。南岸のラブハン儀礼はパランクスモの砂浜の囲われた聖地で行われるが、そこは海底にある女王の王宮への入り口でもある。マタラム王国の実質的な始祖となるセナパティ Senapati は、その海底の宮廷においてカンジェン・ラトゥ・キドゥルと結ばれ3日3晩の蜜月を過ごす。セナパティはこの間ジャワの偉大な諸王の始祖となるとの予言、人間と精霊を統べるために王として備えるべき様々な教え、そして困難に際会した時の援助（とりわけ精霊の軍隊が援軍にやってくる）の約束を得て地上に戻ってくる〔青山2004: 44-46参照〕。南海の女王はニヤイ・ロロ・キドゥル Nyai Loro Kidul などの名前でジャワ島の南岸各地に様々な民間伝承がある〔ENI 2: 535; 中島1993: 16-23〕。民間で様々な語られる南海の女王の物語が、マタラム王家の正統性を主張するための『ババッド・タナ・ジャウイ』で語られていることは、これら民間伝承を王権正統化のために国家伝承として取り込んだことを意味する。その結果として、民間でそれぞれ供物が捧げられるのとは別に、宮廷儀礼としてのラブハン・ダルムが行われるのである。

ムラピ山ではもとより様々な民間伝承が語られてきた〔Lucas 2010: 43-89〕。その中でラブハン儀礼に関わるものとして、カンジェン・ラトゥ・キドゥルが別れの際にセナパティに、

6) ジャワ暦はスルタン・アグンが西暦1633年に古来のシャカ暦に代えてヒジュラ暦を導入したものである。ただし、年次はシャカ暦のものが継続使用される。

7) 1930年代のラウ山におけるラブハン儀礼について Adam [2003] に具体的な記述がある。またその中では祀られる精霊はもっと多様である。

マタラムに戻ったら食べるようにと与えた玉子に由来する物語がある。マタラムに戻ったセナパティがその玉子を食べようとすると、軍師役を務める叔父のジュルマルタニ Juru-martani が、それを食べたならお前も精霊になってしまうと制止する。玉子は家臣のジュル・タマン Juru Taman に与えられ、玉子を食べると精霊の姿に変身してしまった。そこでセナパティはジュル・タマンにグステイ・パネンバハン・サブジャガッド Gusti Panembahan Sapujagad の名前を与えて精霊の支配者としてムラピ山に遣わしたという〔Purwadi 2007: 269-270〕。グステイとパネンバハンは尊称であり、サブはジャワ語で掃除する、ジャガッドはサンスクリット語源で世界、宇宙、大地の意味なので大地（世界）を清める尊者というほどの意味であろう。ムラピ山のラブハンではこの精霊のみならずその他の土着の精霊たちにも供物が捧げられる。ドレピは苦行中のセナパティをカンジェン・ラトゥ・キドゥルが訪ねてきて蜜月を過ごしたと伝えられる場所である〔Purwadi 2007: 265-267〕。

現在ラブハンは誕生日（または即位日）の翌日の他、スルタンが子供の結婚に同意した時などの特別の機会にも行われるが、これはバラクスモでのみ質素に行われ、参加する一般人は少ないという〔Purwadi 2007: 268-269〕。一般のラブハンでは単なる見物人や観光客も含めて一般人も参加することができ（ただしジャワの伝統衣裳を着なければならない）、観光案内のパンフレットにも南海と北山の儀式の写真がしばしば掲載される⁸⁾。

さて、ラブハンにおいて王と王宮は、精霊の支配者や精霊たちが必要とする食べ物、衣服、花、その他の品物を捧げて援助する。これに対して精霊の王宮は、王と王国の安寧を維持し、人民を災害から守り、何らかの災厄が生じる時には靈感（ウィシク wisik）をとおして報告せ、また必要な時には援助を与える。定期的なラブハンをとおして人間界の王および王宮と精霊界の王および王宮とが相互の協力、調和、相互扶助の関係を再確認し更新するのである〔青山2004：54参照〕。まわりの4つの王宮の精霊たちは5つの王宮を相互に訪問しあうとされる。ムラピ山の民間伝承では精霊たちはとくにムラピ山、ジョクジャカルタ、南海の3つの王宮の間で頻繁に訪問しあうという。ジョクジャカルタ王宮の儀礼や、舞踊や音楽などの芸能行事には、人間には見えないけれども精霊たちも参加しており、そのような機会には精霊への敬意を欠かしてはならないのである〔Purwadi 2007: 271; Argo 2006: 96-105; Lucas 2010: 117-120〕。先に述べたスラカルタの宮廷舞踊関係者が、瞑想や舞踊ブドヨ・クタワンを始める前に香を焚いて四方の神々に祈るのは、このような文脈においてより一層理解できるのである。

南海の女王カンジェン・ラトゥ・キドゥルは時間を超えて生き続ける永遠の存在であり、セナパティを継いだマタラムの歴代の王と結婚するとみなされてきた。『ババッド・タナ・ジャウイ』でそのように予言されており（第5章）〔深見訳 2012b: 60-61参照〕、スラカルタ

8) このように3箇所ないし4箇所のラブハン儀礼は一般に公開されている。これに相前後して王宮内でも儀礼が行われるはずであり、その一部分はNHKで放映されたことがある〔NHK 2002: 150-159〕。しかし筆者には王宮内の儀礼の全体像は不明である。

のスフナンは現在も即位日の夜を、王宮内にそのためにとくに建てられた八角形の塔の特別室でカンジェン・ラトゥ・キドゥルとともに過ごすと言われている。『ババッド・タナ・ジャウイ』ではまた、セナパティの孫であり、ジャワ史上最大の征服王であるスルタン・アグンの南海の女王との邂逅が語られている（第61章）〔Ras 1987a: 140; Ras 1987b: 145〕。今日もスフナンの即位の祝典で演じられる家宝のブドヨ・クタワンの創作に、このスルタン・アグンと南海の女王の邂逅が深く関わっていること、したがってこの舞踊の聖性が高いとされることを青山が分析している。その中で南海の女王自ら花嫁の姿をして振り付けを教えにきて、それは3カ月続いたという伝承が紹介されている〔青山2004: 48-50〕。それゆえ今日でもこの舞踊が行われるときに南海の女王は必ず参列しているのである。クタワンのみならず、ランバン・サリ Lambang Sari やスマン Semang などのやはり南海の女王に関係づけられる舞踊が演じられると精霊たちが出席するとされる〔Argo 2006: 135〕。なお、クタワンを踊るのは宮廷の宰相と8人の高官の娘（または孫娘）あわせて9人である。ここにも上で示した聖なる9という数字のシンボリズムが現れている。

既述のように、スラカルタの北のクレンドワホノの森は20世紀においてもドゥルガーの森とみなされている。他方、インド洋の荒波、強い風、そして断崖絶壁という荒ぶる海のイメージゆえに、とりわけ民間伝承における荒ぶる南海の女王を女神ドゥルガーの転生とみなすのは自然な発想である〔Ras 1987b: XLV-XLVI; Brakel 1997〕。とすれば、南海の女王と結婚する歴代の王はドゥルガー女神の夫シヴァ神であることになる。南海の女王の伝説やラブハン儀礼の背景の中から古代のインド文化の影響を掘り出すならば、古代ジャワのヒンドゥー教でも圧倒的に有力であったシヴァ神への信仰が現れてくるのである。すなわち、青山が指摘するとおり、ジャワの文化とインドの文化が古代において摺合して形成された文化において、南海の女王はジャワ的極の体現者であると同時にインド的なものと親和性をもっているのである〔青山2004: 50〕。

6 マリジャン翁——ムラピ山の番人

2006年5月に地震が起こった時、ムラピ山は前年から火山活動が活発化していて、この年の4月に溶岩ドームが形成され始め、南側に崩落するようになり、6月14日に最大の火砕流が発生した。この噴火による犠牲者は地震に比べればはるかに少なかったが、南側の中腹、人の居住する最上部の村の一つカリアデム Kaliadem 村は壊滅的打撃を受けた。廃墟と化した村に待避所が残っている。これは2001年の噴火の後に設けられたもので、現地でブンケル bunker と呼ばれる。入り口に BUNKER と書いてあり、語源は英語であろう。百人ほども収容可能な鉄筋コンクリート製の大きな箱であるが、火砕流の前に無力であった。ここはムラピ山の美しい山容と深く険しい溪谷などの自然美そしてその素朴な生活を目当てにやってくる観光客が多いところである。ブンケルは彼らを噴石から保護するためであって、もともと火砕流を想定していなかったと思われる。

ムラピ山のラブハン儀礼執行の中心になるのは、スルタンの家臣（あるいは王宮の廷臣）たるムラピ山のジュルクンチ（Jurukunci 鍵番、番人）である。2006年当時は、カリアデム西隣のキナルジョ Kinahrejo 村のマリジャン翁 Mbah Maridjan であった。1927年生まれのマリジャンは、1982年に死去した父を継いで、1983年ハムンクブウォノ9世によりジュルクンチに任命された。その時マス・スラクソミヨノ Mas Suraksomiyono という貴族の称号と名前を与えられ、翌年父と同じマス・ガベヒ・スラグソハルゴ Mas Ngabehi Suragsohargo という称号と名前に昇進した。マリジャンは周囲の人々からスクティ sekti（霊力。語源はサンスクリット語 śakti）のある人、イルム ilmu（学問。語源はアラビア語 'ilmu）のある人と認められただけでなく、ムラピ登山や観光、またラブハン儀礼などによる「村おこし」に務めたことでも、まわりの人々から厚い信頼を寄せられたという〔Asihono 2011: 2-3〕。ここで注意が必要なのは、過去はいざ知らず現在においては、廷臣の地位はほとんど収入を伴わないことである。その月俸は日給にも相当しないほどのわずかな金額であり、その地位は名誉あるいは自己満足のためである。

ムラピ山は世界でも最も危険な火山の一つとみなされ、観測体制が整備されている。活動が活発化し噴火が予知されると避難勧告が出される。2006年の噴火の際マリジャンは避難勧告が出る中、廷臣であるジュルクンチとしての責任と職務への忠誠のためとして、山を降りなかった。ムラピ山を護るためであり、キナルジョとジョクジャカルタの王宮が噴火から安寧であるよう祈るためという理由であった。ジョクジャカルタ特別州知事でもあるスルタン・ハムンクブウォノ10世に説得されたにもかかわらず、山を降りなかった。彼のこの頑固さはテレビやインターネットを通じて全国に伝えられ、勇敢なムラピ山の番人として国民的な人気を博することとなった〔Asihono 2011: 2-3〕。

ムラピ山の次の噴火は2010年に起こった。マリジャンはこの時も同じ理由で山を降りなかった。今度はインドネシア共和国副大統領が説得に当たったが、やはり頑固であった。10月24日政府の避難命令に対しても、家族やまわりの人々を避難させたが自身は山を降りず、彼とともにとどまった隣人16人とともに、10月26日大火砕流にとまなう熱雲に飲み込まれた〔Asihono 2011: 2-3〕。

新聞報道によれば、2006年の強制避難は山の南側の1万人だったのに対して、この年の避難者は全方向にわたり38万人を数えた。避難勧告地域は火口から15キロまで拡大した。これは火口とジョクジャカルタ中心部のほぼ中間にあたる。今回は火砕流もはるかに大規模であり、キナルジョ村は全滅した。その西側の有名リゾート地カリウラン Kaliulang でも犠牲者は出なかったが、木々が焼け焦げるなどの被害が及んだ。カリアデムでは例のブンケルはすっかり埋まってしまって今回もまったく役に立たなかった。

2010年の一連の噴火による犠牲者は全体で400人近くに達した〔『アジア動向年報』2007: 396-7〕。もちろん被害は人命と健康だけでなく、住居などの建物のみならず、農作物や家畜、道路や橋その他社会インフラなど多方面にわたり、人々の生活を破壊し、深刻な影響を与え

た。避難民の一部は早くも11月末には村に戻り始めたというが、これは小規模畜産も兼業する零細農家が多く、家畜の世話のため危険を承知で戻ったのである。そのころ折から雨季が本格化し、莫大な量の噴出物のため、各地で土石流による二次災害が発生した。

マリジャンの息子の一人アシホノ Asihono が2011年4月3日スルタンによって新しいジュルクンチに任命され（同時に村長 lurah にも任命された）、そのもとで2011年7月3日にラブハンが行われた。そこには早く元の生活に戻りたいという願いが込められている〔Boy 2011: 68, 72〕。しかし、その道は遠いのが実情である。筆者は最近では2013年9月にキナルジョ村を訪れたが、住居はまだほとんど再建されず、村は被災当時とほとんど変わらない姿であった。目立つのは村が被災地観光の基地になったことである。ジョクジャカルタはもともと全国から観光客がやってくるが、その一部がここまで足を延ばす。被災地観光の定番コースの一つは村の中の元のマリジャン翁の家であり、被災当時の様子が保存され、説明板が設けられている。例のブンケルを4輪駆動車やバイクで訪れるのがもう一つの定番コースであり、その途中は、かつて緑におおわれた豊かな村と里山であったとは想像できない、荒涼とした土石の堆積地帯であり、土や砂利、石を採取するダンプカーが多数行き来している。なお、ラブハンが行われる場所は、キナルジョ村から尾根筋を1時間あまりかかるところにあり、このルートの下部は火砕流の熱雲に襲われたが、その聖所は無傷であった。

7 知事世襲制

本稿の最後にジョクジャカルタ特別州知事職の世襲制という、王の神格化に関わりがあるかもしれない最近の動きを紹介しておきたい。

まず、ジョクジャカルタが特別州とされる背景には、インドネシア共和国成立そのものに関わる次のような事情がある。日本敗戦3日後の1945年8月17日、インドネシア共和国が独立宣言を発した時に、ハムンクブウォノ9世とパクアラム8世はいち早くこれを支持すること、そしてジョクジャカルタはその中の特別地区であることを宣言した。インドネシア政府は復帰を図るオランダの厳しい圧力に堪えきれず、早くも1946年1月4日、正副大統領はじめ政府首脳が首都ジャカルタから列車でジョクジャカルタに避難してきた。こうして1949年末に独立を達成するまでジョクジャカルタがインドネシア共和国の首都であった。生まれたばかりの共和国を受け入れ、苦難の独立戦争期を支えたハムンクブウォノ9世の功績は大きく、大統領をいただく共和制のインドネシアの中で、ジョクジャカルタは特別州の地位を与えられ、ハムンクブウォノ家当主が州知事、パクアラム家当主が副知事の職に就いてきた。

スハルト政権期まで州知事は中央から任命されるか、州議会が選出する場合も事実上中央政権の意向に従う人選が行われてきた。しかし、1998年5月スハルト体制が崩壊して民主化と地方分権が進展するなかで、地方の首長と議会は村、県・市（県と市は同格）、州の3つのレベルで住民の直接選挙により選ばれるようになった。国政レベルでも2004年にはそれまで国会内で選挙されていた正副大統領が国民の直接選挙で選ばれるようになった。これは国

家元首の選挙としては世界最大の直接選挙であり、こうして成立したスシロ・バンバン・ユドヨノ政権（第1期2004－2009年、第2期2009－2014年）のもとで、汚職や非効率などの問題を抱えつつも、政治の安定と経済の拡大が維持されている。なお議員と首長の任期はすべて5年であり、大統領も地方首長も2期までと定められている。

こうした民主化の流れのなかで、ジョクジャカルタ特別州知事を従来どおり世襲制とするか他の州と同じように公選制にするかという、それまで考えられなかった問題が浮上したのである⁹⁾。

きっかけは2008年ハムンクブウォノ10世が、知事職を辞任し新知事の選出を住民による直接選挙に委ねようと言ったことであった。この発言の真意がどこにあるのか筆者には不明であるが、これに対してユドヨノ政権は2008年10月7日、大統領令によりハムンクブウォノ10世の知事職を3年間延長した。この間に国会でジョクジャカルタ特別州法を制定して正副知事選出方法を定めようとしたのである。

2009年に成立した第2期ユドヨノ政権は、2010年12月2日の閣議において、選挙による選出というジョクジャカルタ特別州法の政府案を決めた。しかし国会の各政党のうち、大統領の出身政党である民主主義者党が政府案を支持した以外は、与野党とも世襲案支持が6党と多く、2党が法案の国会提出を待つ様子見だった。現地ジョクジャカルタでは政府案への反対運動が高まり、1か月後の2011年1月4日にはハムンクブウォノ10世は州知事令によって、ジョクジャカルタを共和国都市(Kota Republik)と宣言し、1月4日を共和国都市記念日に制定した。1月4日は上記のように、1946年インドネシア共和国政府要人がジャカルタからジョクジャカルタに到着した日である。ハムンクブウォノ10世は、独立への貢献に訴えて世襲制維持の立場を鮮明にしたといえる。2011年10月9日に大統領令による3年間の任期が終わるが、国会審議はなお結論が出ないので再度大統領令によってもう1年間延長された¹⁰⁾。

2012年6月になって政府は普通選挙案を撤回し、世襲を容認した。この世襲案は6月13日のユドヨノ大統領とハムンクブウォノ10世の会見で合意し、これをふまえて8月30日国会でジョクジャカルタ特別州法が成立した(2012年法律第13号)。正副知事は各々ハムンクブウォノ家とパクアラム家の世襲となり、5年ごとに特別州議会が承認し大統領が任命することになった。一方で特別州正副知事には30歳以上、大学卒、前科なし、私産リストの提出と公表などの資格要件が課され(特別州議会がその検証責任を負う)、あわせて政党所属が禁止された¹¹⁾。私産リストが簡単に作成できるとは想像できないが、その中にどのような項目が含ま

9) 以下では煩を省くため典拠をいちいち示さないが、すべて当時の新聞報道(とくにコンパス *Kompas*)に基づいている。

10) ちょうどその頃2011年11月16～19日、ハムンクブウォノ10世の末娘の婚礼が華々しく執り行われた。ハムンクブウォノ7世(位1877-1921年)時代の婚儀を踏襲し、またジョクジャカルタ建市255周年を兼ねて4日4晩様々な祝典が行われた。

11) 正副州知事の資格要件に性別はない。ハムンクブウォノ10世には5人の子があるが(妻は1人)い

れるか、神格化の観点からも興味深い問題である。政党所属の禁止は、正副大統領への立候補など国政に関与できないことを意味する。

こうしてユドヨノ政権はジョクジャカルタ特別州にのみ、民主主義の原則から逸脱した正副州知事の世襲を制度化したのであった。当初は普通選挙を考えていたユドヨノ政権が妥協せざるをえなかった中央政界の政治的な事情は政治学者の分析にゆだねるが、新聞報道に見る限り現地ジョクジャカルタの世論は圧倒的に世襲制を支持している。

おわりに

ジョクジャカルタでは2006年南海北山の天変地異に際して、スルタンに災厄を除くための出座を求める声が上がった。その背後にはおそらく千年以上にわたって培われてきた、王権神格化の伝統がある。それはジャワ土着の要素がインド文化と摺合したもので、その後にイスラム化してからも持続してきた伝統である。その中で王には世界の中心にあり、神々の子孫であって、死後は神として祀られるという位置づけが与えられてきた。スルタンは不可視界とりわけジャワの精霊の支配者と交信能力をもつとされ、そのチャンネル（の一つ）がラブハンである。本稿では取り上げる余裕がなかったが、ジャワの歴史においてこうした超能力をもつのは王に限られるわけではない。様々な宗教者や修行者、また鍛冶師のような一芸に秀でた者たちやマリジャン翁のようなジュルクンチにもそうした超能力があると見なされる〔cf. Anderson 1972〕。

今や時代が変わり、人々が広く教育と合理的思考を手に入れたのだからと、そういう非科学的な攘災の効果に対して、王宮の責任者自身が懐疑的な発言をしていて、伝統はおおいに揺らいでいる。山守のマリジャン翁がスルタン自身の説得を拒んで山を降りなかったのは伝統に背くのか忠実なのか筆者にはよくわからない。頑固な山守は2010年の噴火の際に殉職したが、スルタンはその後まもなくその息子をジュルクンチに任命し、ラブハンを執行させている。不可視界との友好関係を重視する伝統は維持されているように見える。さらに最近の動きとして、首長公選制があまねく行われるようになった民主主義国家インドネシアにおいて、ジョクジャカルタ特別州知事職は国法によりスルタン家の世襲と定められた。今後も起こるであろう天変地異の際にスルトンの役割がどうなるのか、目が離せない問題である。

参 考 文 献

青山亨2004「南海の女王ラトゥ・キドゥル 19世紀ジャワにおけるイスラームをめぐる文化表象のせめぎ合い」『総合文化研究』8: 35-58.

『アジア動向年報』各年版, 日本貿易振興会アジア経済研究所研究支援部

石井和子1994「ジャワの王権」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』山川出版社: 69-89.

岩本裕1988『日本仏教語辞典』平凡社

ずれも女性なので、次の当主に女性がなるのか、あるいは一族から男性を立てるのか京雀は話題に事欠かない。なお、9世は5人の妻から男女22人の子を設けており、10世はその第5子である〔Djoko 2009: 489-490〕。

- NHK「アジア古都物語」プロジェクト編2002『ジョグジャカルタ 支えあう王と民』日本放送出版協会
- オッセンブリュッヘン, F. D. E. ファン1987「ジャワにおけるモンチョパット概念の起源——未開の分類体系とのかかわりで」*ヨング*1987: 67-103.
- 千原大五郎1975『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会
- 中島成久1993『ロロ・キドゥルの箱 ジャワの性・神話・政治』風響社
- 鳴海邦碩他1993『神々と生きる村 王宮の都市』学芸出版社
- ハイネ・ゲルデルン1982「東南アジアにおける国家と王権の観念」綾部恒雄他編『文化人類学リーディングス』アカデミア出版会: 49-71. [Heine-Geldern, R. 1956 *Conceptions of State and Kingship in Southeast Asia*, Cornell University.]
- ピジョー, Th. G. Th. 1987「ジャワの占いと分類体系」*ヨング*1987: 105-131.
- 深見純生訳2003「ケン・アンロク伝」『国際文化論集』(桃山学院大学) 27: 83-104.
- 深見純生2008「震災にみるジャワ社会の特徴」『桃山学院大学総合研究所紀要』34-2: 91-96.
- 深見純生2011「マタラムの建国年次について——『ババッド・タナ・ジャウイ』という文学と歴史のはざままで」『国際文化論集』(桃山学院大学) 44: 29-48.
- 深見純生訳2012a「ババッド・タナ・ジャウイ (1) 第1部 ババッド・バジャジャラン」『国際文化論集』(桃山学院大学) 45: 145-163.
- 深見純生訳2012b「ババッド・タナ・ジャウイ (2) 第2部 ババッド・マジャパイト」『国際文化論集』(桃山学院大学) 46: 55-78.
- ヨング, P. E. デ=ヨセリン=デ他著, 宮崎恒二他訳1987『オランダ構造人類学』せりか書房
- Abdul Baqir Zein ed. 1999: *Masjid-masjid Bersejarah di Indonesia*, Gema Insani, Jakarta.
- Adam, L. 2003: “The Royal Offerings on Mount Lawu”, in Robson 2003: 265-279.
- Aim 2007: “Tradisi Labuhan”, *Keris*, 2007-2: 20-21.
- Amin Pujanto 2007: “Harapan Masyarakat Yogya “Keraton Jangan Diam Saja!””, *Keris*, 2007-2: 14-15.
- Anderson, Benedict R. O’G. 1972: “The Idea of Power in Javanese Culture”, in Claire Holt ed., *Culture and Politics in Indonesia*, Cornell University Press, Ithaca, New York: 1-69. (中島成久訳1995「ジャワ文化における権力観」中島成久訳『言葉と権力』日本エディタースクール出版部: 31-108)
- Argo Twikromo 2006: *Mitologi Kanjeng Ratu Kidul*, Nidia Pustaka, Yogyakarta.
- Asihono Maridjan, Bekel Enom and Budiman 2011: *Legenda Mbah Maridjan dan Gunung Merapi*, Kinahrejo Production n.d. (2011).
- Boechari 1975: “Ken Anrok: Bastard Son of Tungul Ametun?”, *Majalah Ilmu-ilmu Sastra Indonesia*, 6-1: 15-33.
- Boy T. Harjanto 2011: *Merapi Volcano*, Nayan, Sleman, Yogyakarta. (reprint 2012)
- Brakel, Clara 1997: “Sandhang-pangan for the Goddess: Offerings to Sang Hyang Bathari Durga and Nyai Lara Kidul”, *Asian Folklore Studies*, 56: 253-283.
- Danumurti 2007: “Masih ada Kanjeng Kiai Tunggul Wulung”, *Keris*, 2007-2: 12-13.
- Djoko Dwiyanto 2009: *Kraton Yogyakarta: Sejarah, Nasionalisme, & Teladan Perjuangan*, Paradigma Indonesia, Yogyakarta.
- ENI: Encyclopaedie van Nederlandsch-Indië*, 8 vols., 1917-1938.
- Keris*, 2007-2. (注3参照)
- Headley, Stephen C. 2004: *Durga’s Mosque: Cosmology, Conversion and Community in Central Javanese Islam*, ISEAS, Singapore.

- Mohammad Hasan Basri 2007: *Contesting the Meanings of Disaster: A Study on Wonokromo People's Responses to the May 27, 2006 Earthquake*, MA Thesis, Center for Religious and Cross-cultural Studies, Gadjah Mada University.
- Kinney, Ann R. 2003: *Worshipping Siva and Buddha: The Temple Art of East Java*, University of Hawai'i Press, Honolulu.
- Krom, N. J. 1931: *Hindoe-Javaansche Geschiedenis*, 's-Gravenhage.
- Lucas Sasongko Triyoga 2010: *Merapi dan Orang Jawa: Persepsi dan Kepercayaannya*, Gramedia, Jakarta.
- Purwadi 2007: *Ensiklopedi Adat-istiadat Budaya Jawa*, Panji Pustaka, Yogyakarta.
- Ras, J. J. 1987a: *Babad Tanah Jawih: De prozaversie van Ngabehi Kertapradja voor het eerst uitgegeven door J. J. Meinsma en getranscribeerd door W. L. Olthof*, Tweede herziene druk verzorgd en ingeleid door J. J. Ras, Foris, Dordrecht.
- Ras, J. J. 1987b: *Babad Tanah Jawih: Javaanse Rijkskroniek W. L. Olthofs vertaling van de prozaversie van J. J. Meinsma lopende tot het jaar 1721*, Tweede herziene druk verzorgd en ingeleid door J. J. Ras, Foris, Dordrecht.
- Robson, Stuart tr. 1995: *Deśawarnana (Nāgarakṛtāgama) by Mpu Prapañca*, KITLV Press, Leiden.
- Robson, Stuart ed. 2003: *The Kraton: Selected Essays on Javanese Courts*, KITLV Press, Leiden.
- Rouffaer, G. P. 1918: "Oudheidkundige Opmerkingen", *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, 74: 138-166.
- Rouffaer, G. P. 1927: "Tijdrekening", *ENI* 5: 401-415.
- Rouffaer, G. P. 1931: "Vorstenlanden", *Adatrecht Bundels*, 34: 233-378.
- Soedjana Tirtakoesoema 2003: "The procession with Kangjeng Kyai Tunggul Wulung at Yogyakarta Thursday/Friday 21/22 January 1932 (Jumuh-Kliwon 13 Pasa, Je 1862)", in Robson 2003: 91-106.

(2014年4月23日受理)

Natural Calamities and Divine Kingship in Central Java

FUKAMI Sumio

Following the twin natural calamities—an earthquake preceded by a volcanic eruption—that affected Yogyakarta, Central Java, from April to June of 2006, there were calls for the sultan to perform his traditional role of appeasing the spirits assumed to be responsible. Such calls had their origin in Java’s tradition of divine kingship, a tradition which dated back more than a thousand years. Originally a compound of indigenous factors and cultural influences from India, the tradition persevered even after Java’s subsequent conversion to Islam. Within it, the sultan was considered the centre of the world, a descendant of gods who would himself be worshipped as a god following his death, and who possessed the ability to communicate with the Other World, particularly with those who held sway over Java’s spirit community, by means of (among other things) the rite of *Labuhan*.

With more and more people gaining access to modern education and acquiring a rational outlook, and with even the occupant of the royal palace openly expressing doubts regarding the effectiveness of non-scientific approaches to warding off disaster, Java’s divine kingship tradition has inevitably been jolted. When the *Mbah Marijan*, the *jurukunci* [literally, “key-minder”; responsible for minding cemeteries and holy spots] of Mt. Merapi, in spite of increasingly-frequent volcanic activity, rejected the sultan’s personal urging and refused to come down from the mountain, it is hard to say whether he was upholding or rejecting that tradition. In 2010, Mt. Merapi erupted again following a period of inactivity, and the obdurate old man became its first victim. Within a short time, however, the sultan chose the man’s son to succeed his father as *jurukunci*, and ordered him to carry out the *Labuhan* rites on his behalf without delay.

In this way, Java’s emphasis on maintaining harmonious contacts with the spirit world would appear to have been sustained. Still more recently, despite the emergence of a democratic Indonesia where local leaders are elected by popular vote, the position of Governor of the Yogyakarta Special Region has been declared by national law to be the hereditary fief of the sultan’s family line. It will be fascinating to observe what kind of part the sultan will play when the next natural calamity hits Java, as one day surely it must.